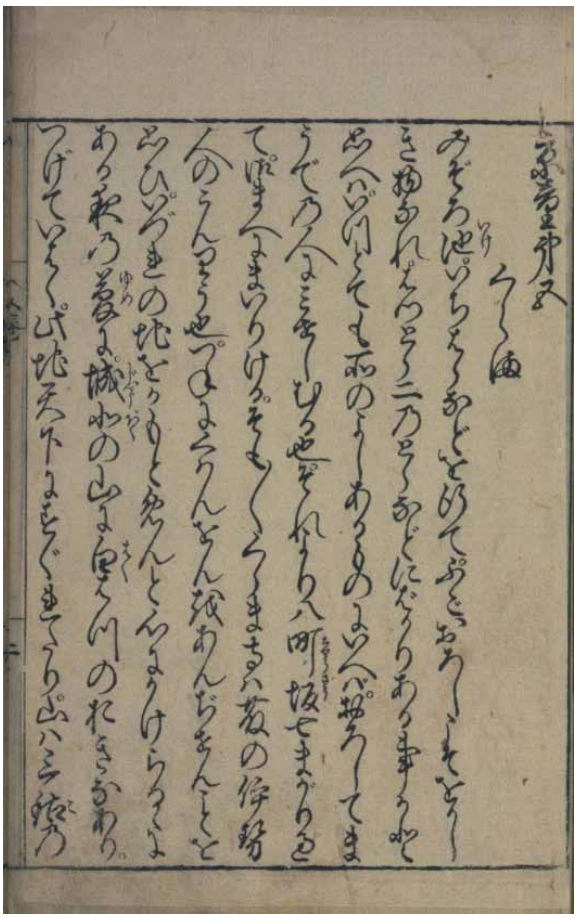
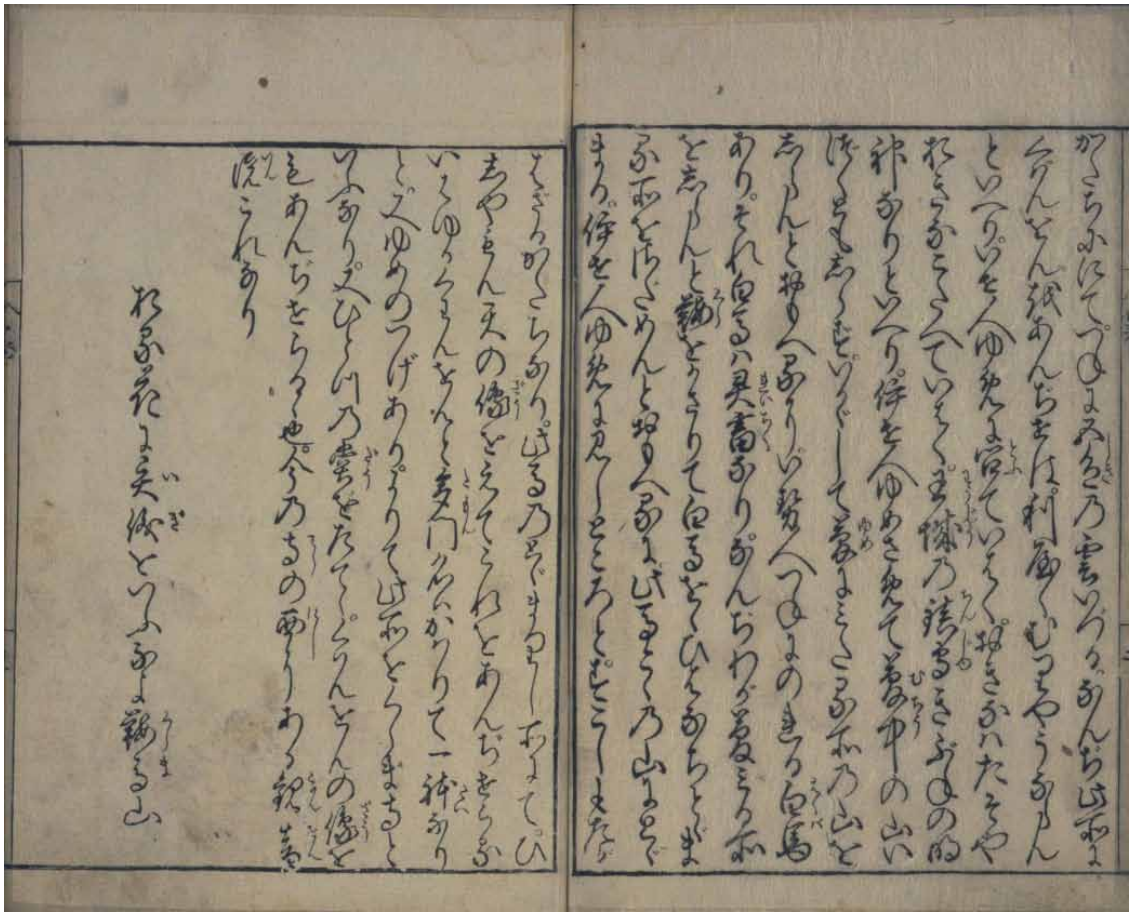
巻五「鞍馬」



京都府立総合資料館蔵



京都府立総合資料館蔵

京都府立総合資料館蔵

【原文】

くらま

みぞろ池。いちはらなどを行て。ふごおろしこそをかしき物なれ。はつとら二のとらなどにばかりある事かと思へば。いつとても所のよしあるものにいへば。おろしてまうでの人にみせしむる也。それより八町坂七まがり過て。御まへにまいりける。そもくくらま寺は藤の伊勢人のこんりう也。つねにくはんをんをあんぢせんことを思ひ。いづれの地をかもとめんと心にかけらるゝにある夜の夢に。城北の山に白はつのおきなあり。つげていはく。此地天下にすぐれたり。山は三鈷の(二才)かたちにして。つねに五色の雲いづる。なんぢ此所にくはんをんをあんぢせは。利やくむりやうならんといへり。いせ人ゆめに問ていはく。おきなはたそやおきなこたへていはく。王城の鎮守きぶねの明神なりといへり。伊せ人ゆめさめて夢中の山いづくともしらず。いかゞして夢にみたる所の山をしらんとおもへるに。いせ人つねにのれる白馬あり。それ白馬は霊畜なり。なんぢわが夢みる所をしらんと鞍をかさりて白馬をゝひはなちとゞま

る所をさだめんとおもへるに。此馬こゝの山にとゞまる。伊せ人ゆめに見しところと。すこしもたが（二ウ）はざるかたちなり。此馬のとゞまりし所にて。ひしやもん天の像をえてこれをあんぢせらるいはゆるくわんをんと多門名はかはりて一躰なりと。又ゆめのつげあり。よりて此所をくらま寺といふなり。又ひとつの堂をたてゝ。くはんをんの像をもあんぢせらるゝ也　今の寺の西にある観音院これなり

おる花に異儀をいふなよ鞍馬山　（三オ）

【校訂本文】

鞍馬

深泥池、市原などを行きて、「畚降ろし」（注1）こそをかしきものなれ。初寅二の寅（注2）などにばかりある事かと思へば、いつとても所の由ある者に言へば、降ろして詣での人に見せしむるなり。それより八町坂七曲がり（注3）過ぎて、御前に参りける。

そもそも鞍馬寺は藤の伊勢人（注4）の建立なり。常に観音を安置せんことを思ひ、いづれの地をか求めんと心に懸けらるるに、ある夜の夢に、城北の山に白髪の翁あり。告げて曰く、この地天下に勝れたり。山は三鈷(注5)の形に似て、常に五色の雲出づる。汝この所に観音を安置せば、利益無量ならんと言へり。伊勢人夢に問ふて曰く、翁は誰ぞや、翁答へて曰く、王城の鎮守貴船の明神(注6)なりと言へり。伊勢人夢醒めて、夢中の山いづくとも知らず、いかがして夢に見たる所の山を知らんと思へるに、伊勢人常に乗れる白馬あり。それ白馬は霊畜なり。汝我が夢見る所を知らんと、鞍を飾りて白馬を追ひ放ち、留まる所を定めんと思へるに、この馬ここの山に留まる。伊勢人夢に見し所と少しも違はざる形なり。

この馬の留まりし所にて、毘沙門天（注7）の像を得て、これを安置せらる。いはゆる観音と多聞（注8）名変はりて一体なりと、また夢の告げあり。よりてこの所を鞍馬寺と言ふなり。また一つの堂を建てて、

観音の像をも安置せらるるなり。今の寺の西にある観音院（注９）これなり。

折る花に異議を言ふなよ鞍馬山

【注】

（１）畚は籠のこと。これを縄を付けて崖の上から下に降ろし、参詣人がそこに銭を入れると、その畚を引き上げて、銭に見合うだけの火打ち石（燧）を入れてまた降ろす、という仕組み。鞍馬山では特に勝れた火打ち石を産出した。『雍州府志』巻六土石部にも詳しく紹介されている。

（２）毘沙門天の顕現したのが、寅の月寅の日寅の刻という寺伝により、毎年の年初の初寅の日、次ぎの二の寅の日に行われる祭事。

（３）表参道にある由岐神社からの九十九折（つづらお）れの上り坂の道。一町ごとに町石が置かれている。

（４）藤原南家の藤原伊勢人（いせんど）。『今昔物語』巻十一や『扶桑略記』によれば、延暦十五年（七九六）に当時造東寺長官であった伊勢人が、ここに記されたような事情で、鞍馬寺を創建したと伝える。

（５）密教法具の一つ。両方の先端が三つに分かれた金属製の棒。片手に持つ。

（６）貴船の神。貴船川の水神。「丑の刻詣で」で知られる。

（７）仏法の守護神。軍神。七福神の一。多聞天とも称する。鑑真の高弟鑑禎が夢告によってこの地を訪れ、毘沙門天の顕現（注２）を拝して毘沙門天像を安置する草庵を結んだと言われる。

（８）多聞天。仏法を守護する四天王の一。北方を守る。毘沙門天とも

称する。

（9）現在の鞍馬寺（鞍馬弘教）では、毘沙門天、護法魔王尊、千手観音の三尊を「尊天」として祀る。ここでいう観音院は焼失したためか、現存していない。

【現代語訳】

鞍馬

みぞろ池や市原などを通って行きますが、「畚降ろし」というのはまことに興味深いものです。初寅や二の寅の日などだけにあることかと思っていましたが、いつであっても、その地の縁故のある者に言えば、「畚降ろし」をして詣でる人に見せてくれるのです。そこから八町七曲がりの山道を登り、御仏の前に参りました。

そもそも鞍馬寺は、藤原伊勢人が建立したのです。日頃観音菩薩を安置して供養しようと念願し、どこかふさわしい土地を探して手に入れようと心にかけていたところ、ある夜の夢に、都の北方の山に白髪の老人が現れました。その老人が言うには、この地は天下の内にも勝れている、山は三鈷の形に似ていて、常に五色の雲が立ち上っている。お前がここに観音を安置するならば、その霊験は限りなくあらたかであろう、と言うのです。伊勢人が夢の中で尋ねて言うには、ご老人はどなたですか、と。老人が答えて言うには、都の鎮守である貴船明神である、と言うのです。伊勢人は夢から覚めましたが、夢の中の山がどこにあるかわかりません。どうやったら夢に見た場所の山がわかるだろうかと思っていたのですが、伊勢人にはいつも乗っている白馬がいました。そもそも白馬は霊力を持った家畜です。そこで、お前は私の夢に見た場所を知っているだろうと、鞍を飾り立てて白馬を解き放って行かせ、その留まった場所を見

定めようと考えたところ、その馬がこの山に留まったのです。伊勢人が夢に見た有様と少しも違ったところのない形でした。

その馬の留まった所では、すでに毘沙門天の像を得ていて、それを安置されていました。いわゆる観音と多聞天（毘沙門天）とは名前が変わるが一体のものであると、また夢のお告げがありました。そこでその地を鞍馬寺と言うのです。また別に一つのお堂を建てて、観音の像もそこに安置されたのです。現在、寺の西にある観音院というのがそれなのです。

折る花に文句を言うものではないよ、鞍馬山で。

（山崎福之）